

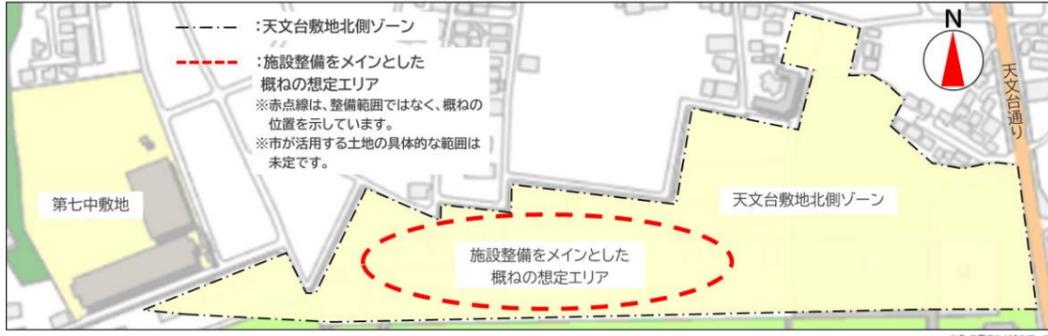
## ◎おおさわ commons の土地利用

現時点でのおおさわ commons の最適な土地利用の考えは下図のとおりです。

この考えに基づき、国立天文台との土地契約に向けた協議に着手(※1)します。具体的な施設配置や計画は、土地利用整備計画(仮称)や設計段階で検討します。

### 施設整備をメインとした概ねの想定エリア

第七中との関連性を考慮し、天文台敷地北側ゾーンの西側に配置します。今後は、学校を含むおおさわ commons の建物とその周辺の緑地部分との一体化や、公園的な利用などを検討します。



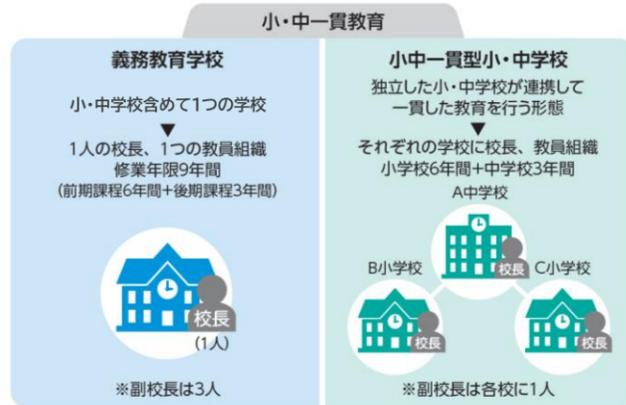
※1 天文台敷地北側ゾーンは、現在、国立天文台の土地です。

## ◎おおさわ commons の整備目標スケジュール



## ◎義務教育学校とは？

義務教育学校は、義務教育9年間の教育を一貫して行うことを目的とした学校です。1つの学校として、1人の校長のもと、1つの教職員組織が一体的に義務教育9年間の教育活動にあたります。三鷹市では15年以上にわたり、小・中一貫教育に取り組んできましたが、いわば、小・中一貫教育の発展形といえる学校です。これにより、児童生徒にとっては、日常的に中学生までを含めた異学年での学びあいや交流が可能となります。教職員も、小学校・中学校の垣根なく、義務教育9年間を見通した教育を行うことができます。中学校教員の専門性を活かした小学校高学年からの教科担任制の導入や教職員組織が大きくなることにより業務の平準化なども可能となります。さらには、小・中一貫教育の軸となる独自教科の設定をはじめとする特色ある弾力的な教育課程の編成も容易に可能となります。



## お問い合わせ

三鷹市国立天文台周辺地区まちづくり推進本部事務局  
〒181-8555 三鷹市野崎一丁目1番1号  
月～金曜日 午前8時30分～午後5時(祝日、年末年始を除く)  
電話 0422-24-9266(まちづくりに関すること)  
0422-29-8349(教育に関すること)  
✉ tenmondai-honbu@city.mitaka.lg.jp



三鷹市ホームページバナー  
「国立天文台周辺地区のまちづくり」  
※基本構想の全文は、市ホームページからご覧いただけます。

守り×育み×集う  
天文台の森  
PROJECT

## 国立天文台周辺地域土地利用基本構想

## 概要版

市では、令和2(2020)年12月に締結した「国立天文台と三鷹市の相互協力に関する協定」に基づき、国立天文台周辺地域を対象に、まちの将来像などの検討を行い、『国立天文台周辺地域土地利用基本構想』を令和6(2024)年10月に策定しました。

天文台敷地の緑の維持保全に取り組みながら、天文台敷地北側ゾーンと七中敷地を地域の共有地「おおさわ commons」と位置付け、緑豊かな環境の中に、森の学校や多世代が集う居心地の良い交流の場、地域の防災拠点を創ります。

今後、本構想で示す内容を軸に、市民の皆さんとともにまちづくりを進めていきます。

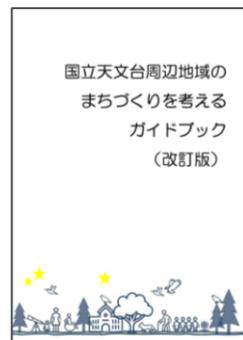
「おおさわ commons」の創出  
とエリア全体のまちづくり

あらゆる災害に備える  
防災・減災まちづくり

次世代へ引き継ぐ  
天文台の森(北側)

子どもを取り巻く  
環境の整備

## 国立天文台周辺地域のまちづくりを考える ガイドブック(改訂版)もあわせてご覧ください



『国立天文台周辺地域土地利用基本方針』の策定と同時に作成したガイドブックを令和6(2024)年10月に全面改訂しました。大沢地域の歴史や現状・課題を示すデータ、写真、図などの資料を掲載しています。



三鷹市



羽沢小・大沢台小・西部図書館・学童保育所を天文台敷地北側ゾーンに移転し、隣接する第七中敷地を含めた全体を、地域の共有地「おおさわ commons」と位置付けます。ここでは、新しい小・中一貫教育校を軸に、図書館等の併設による多世代が集う居心地の良い交流の場と、安全・安心な地域の防災拠点を創ります。おおさわ commons だけでなく、跡地利用施設や周辺の地域資源等を含めたエリア全体のまちづくりにも取り組みます。

## 地域の共有地「おおさわ commons」の創出

### 【おおさわ commonsの主な機能】

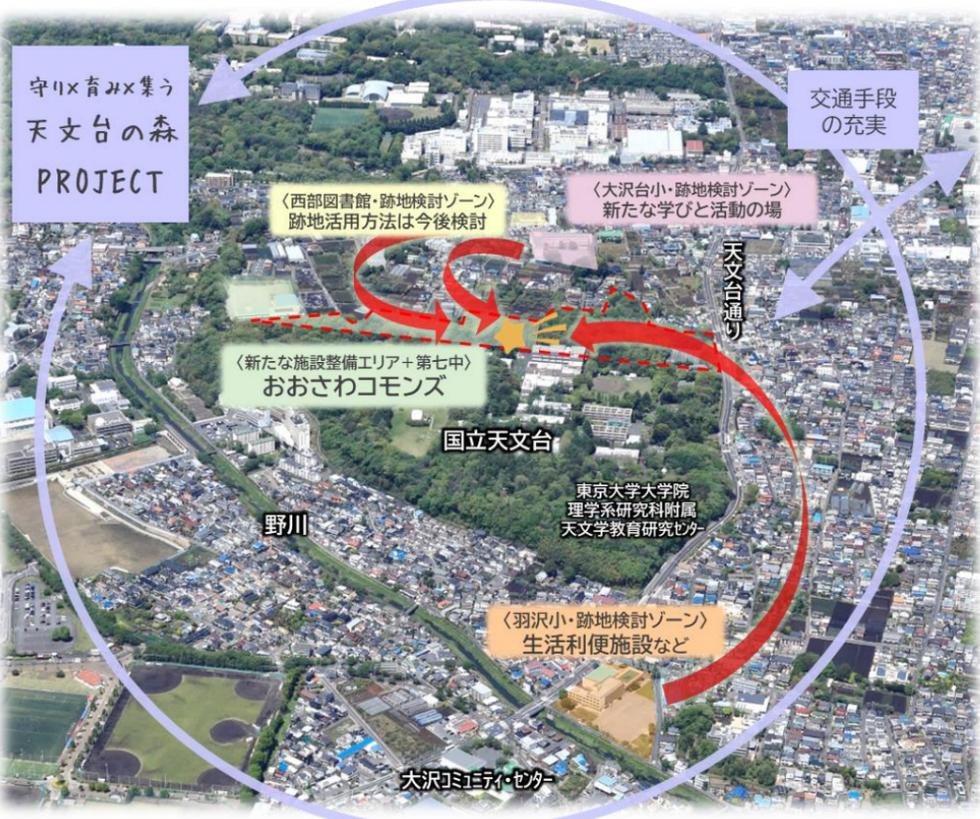
- ①天文台の「森の学校」  
自然豊かな学習環境の中で、国立天文台と連携した教育が受けられる「森の学校」を創ります。
- ②みんなが集う地域の共有地  
移転する西部図書館を中心に新たに設ける交流施設や「学校3部制」の考え方に基き学校施設を活用して、子どもから大人まで多くの世代が森の中に集う、居心地の良い交流の場を創ります。
- ③天文台の森(北側)の次世代への継承  
計画的な植樹・植栽や適切な維持・保全を行います。
- ④命と暮らしを守る防災拠点  
震災・風水害などあらゆる災害に対応するとともに、在宅避難者の支援などにも対応した防災拠点を創ります。

## 地域の身近な交通手段のさらなる充実

AIデマンド交通の拡充のほか、将来的な次世代交通手段の検討など、身近な交通手段の充実により、天文台周辺地域以外にも訪れたい魅力あるまちづくりを目指します。

## 日常生活の利便性を高める「羽沢小跡地」の検討

商業等の生活利便性を満たす施設の誘致により、買物不便環境の解消に取り組みます。また、震災時の一時避難場所の機能継続のほか、野川の景観を活かしたカフェ等の地域交流の場をつくるなど、日常生活の利便性を高める「羽沢小跡地」を公民連携により検討します。



風水害をはじめ、あらゆる災害に対応可能となるよう、おおさわ commons は、命と暮らしを守る防災拠点と位置づけ、避難所機能と在宅避難者に対する支援機能の充実に取り組みます。

## おおさわ commons 全体が防災拠点に

- おおさわ commons が新たな三鷹市の避難所・避難場所のモデルとなるよう検討します。
- ①地域の災害対策活動の拠点
- ②災害時における施設の機能転換
- ③良好な避難生活のための施設の工夫
- ④在宅避難者に対する支援拠点
- ⑤車両での避難も想定した施設整備

## 野川周辺の防災・減災まちづくり

- 野川周辺については、次の検討を進めていきます。
- ①一時避難場所機能の継続  
羽沢小跡地の、震災時の一時避難場所としての機能継続(風水害時を除く)
- ②浸水被害や土砂災害に備える家づくり・まちづくり  
建物の浸水対策や土砂災害への対応を促すための啓発ポスターやチラシの配布、開発計画を行う事業者への指導



- ③防災意識の周知啓発と実効性のある避難方策  
野川周辺の公共施設等での避難先の確保や、浸水深を視覚的に把握する表示物の設置

# 子どもを取り巻く環境の整備

羽沢小と大沢台小をおおさわ commons 内に移転します。天文台の森の自然豊かな学習環境と国立天文台との連携により、「森の学校」を創ります。また、義務教育学校の制度(※裏面参照)を活用した新しい小・中一貫教育校として魅力ある教育を展開します。

## 国立天文台と連携する「森の学校」

- ①自然豊かな学習環境  
天文台の森に囲まれた自然豊かな学習環境を防犯にも配慮しながら、実現します。
- ②小・中一貫教育の更なる充実  
義務教育学校の制度の活用により、これまで以上に充実した小・中一貫教育を展開します。
- ③魅力的な教育の展開  
国立天文台との連携による自然科学教育や、地域資源、自然環境を活かした学びに取り組みます。
- ④みんなが快適な学校施設  
好奇心や創造性を育むような学習空間、ゆとりやぬくもりのある生活空間、教職員も働きやすい執務空間などを整備します。

- ⑤学校3部制のモデルとなる学校施設  
授業で使っていない時間帯の特別教室などを地域の交流拠点として、子どもたちの放課後の居場所や地域活動に活用できる施設にします。
- ⑥地域交流の中心となる滞在型図書館  
西部図書館はおおさわ commons に移転し、地域交流拠点となる図書館を創ります。



# 次世代へ引き継ぐ天文台の森(北側)

旧官舎があったエリアは竹藪に広く覆われ、老木や枯木が増えている状況です。緑地の保全などに配慮した天文台敷地北側ゾーンの有効活用を推進するとともに、天文台の森(北側)を次世代に引き継いでいけるよう検討します。

## 天文台の森(北側)を都市の里山として次世代に引き継ぐ

新たな施設を整備する範囲をできるだけコンパクトにしながら、計画的な植樹・植栽や適切な維持・保全を行うことで、天文台の森(北側)を50年、100年後に誇れる都市の里山として次世代に引き継いでいきます。



竹藪に覆われた枯木



北側ゾーンに官舎が建っていた様子(昭和30(1955)年ごろ)

## 通学へのサポート

- 現状より遠くなる羽沢小の低学年児童を中心に、通学サポートを検討します。
- 案①専用スクールバスの運行案  
おおさわ commons から現在の羽沢小までピストン輸送を軸に、登下校時間帯を考慮したバスの運行を検討する案です。
- 案②路線バスの活用案  
既存の公共交通機関(路線バス)を利用する検討案です。
- 案③AIデマンド交通の活用案  
運行中のAIデマンド交通を利用する検討案です。



## 大沢台小の将来的な跡地利用

誰一人取り残さない教育を目指し、市内全域の子どもを対象とした特別の教育課程による教育を行う学校(学びの多様化学校)の設置などを中心に検討を進めます。子どもの個性に寄り添った新たな学びと活動の場を検討します。